

障害のある個人による正の強化で維持される「できる」の拡大

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
吉尾 玲美

本研究では、障害のある個人の「できる」を拡大するためのアクティブ・シミュレーションの場として、実習生が正の強化が受けられる実習場面を設定した。本研究の目的は、当事者の「できた」に関する言語行動を拡大するための援助設定を検討することである。

本研究では研究Ⅰ・Ⅱの二つの実習を行った。実習に参加したのは、どちらも特別支援学校高等部生徒であった。仕事場面では当事者の行動に対する指示を最低限に抑え、自発した行動を強化することとした。とくに手順書に記されていない適切で新奇な行動が自発した場合には、賞賛とできたカードによる正の強化を試みた。また、それぞれの実習において援助設定の追加・変更を行った。

研究Ⅰ・Ⅱにおいて、実習生の自発的で新奇な行動が生起し続けた。研究Ⅰでは、実習生と適切なやり取りを取ることが困難であった同僚に対してもできたカードを導入するという援助設定を行ったところ、実習生と同僚との間で適切なやり取りが促進され、対象者による「できた」の報告数が増大した。研究Ⅱでは、仕事でのフィードバックと振り返りでの援助設定を変えたところ、「できた」の報告数が増大しただけでなく、できたカードを並べて数える行動、自らの希望を表明する発言が生起した。

実習生が正の強化を受けられるように実習を支援することが、当事者の自発的で新奇な好ましい行動を多様に生起させ、「できた」に関する言語行動を拡大したと推察する。